

今回、私は麻酔科藤田喜久教授に引率していただき、2012年7月にドイツのミュンヘン大学病院へ行くことができましたのでその報告を致します。1ヶ月も海外ですぐすというのは初めての経験で、楽しみや不安をかかえての渡独でしたが、同期の羽間先生と藤田教授のおかげで、悔いの残らない充実した1ヶ月にする事ができました。改めて感謝申し上げます。

私が研修させていただいたミュンヘン大学病院は klinikum grosshaden という中心部から地下鉄で15分の所にある、ミュンヘン大学関連病院の一つです。ミュンヘン大学は別名 LMU(Ludwig-Maximilian-Universität)と呼ばれており、名前の通りバイエルン州の王であったルートヴィヒ1世が建立した歴史ある大学です。ミュンヘンの町は歴史や音楽に溢れており、町を歩けば重厚な建築物に出会い、路上ミュージシャンやオーケストラの生演奏を楽しむ事が出来ます。演奏と日光の元で、ドイツビールを楽しんでいる人で溢れています。LMU のドクター達も自国に誇りを持っていました。歴史を尊重する意思、美術・音楽が生活の一部に組み込まれている所に感銘を覚えたのを思い出します。

病院での研修も驚きの連続でした。私は、手術室とICUの見学をさせていただきました。LMUには麻酔科医が200人もいらしく、手術麻酔・リカバリー室・ICU が徹底されていました。移植も含め、30部屋ある手術室は常にフル回転でした。全ての全身麻酔症例は、リカバリー室か ICU へ入室し、執刀医は周術期管理にほぼ関与せず、麻酔科医担当となっています。全身麻酔後に一般病棟へ直帰するのは信じられないと言っていました。

私は、1週間 ICU、3週間整形外科と心臓血管外科手術を見学しました。各科担当のチームが5、6人ずつで構成されており、レジデントも月単位で色々な科の麻酔に携わるようでした。朝は7時半からのカンファレンスで始まりますが、中には7時から麻酔を開始する科もあったり、勉強会が週1であったりと、思っていたより勤勉でよく働きます。カンファレンスが終わる頃には患者はすでに入室しており、看護師が末梢血管確保を行ったりしていました。手術着は医師、看護師、ME、助手(ベッド移動、清掃、手術器具の準備は、体格のいい入れ墨の入った男の助手が行います)に区別は無く、看護師が麻酔維持を行ったり、血ガス採血をするので、始めは区別が付きませんでした。ドイツ語での会話は理解できず、英語でのコミュニケーションも思うように行かず辛い思いもしましたが、徐々に打ち解ける事ができ、つたない英語を理解しようとしてくれて何とか質問できるようになりました。

最後のあいさつをした時には、整形外科のドクターからの「帰りのフライト前に、ここの優秀な麻酔科医に麻酔をかけてもらえれば、あっという間に日本だよ。」といったジョークを理解できるようになっていました。

ドイツ医療についていくつか聞いた所、ドイツでは外科が人気との事でした。麻酔科のドクターの中にも、元々外科医になりたかったけれど、全身管理・ICU が見たいため麻酔科を選んだという人がいて、共感しました。女性の外科医が多く見受けられましたが、やはり仕事が大変なのは日本と同じであり、ICU で出会った女性のレジデントも悩んでいると言っていました。

他の病院を見学する事自体始めてでしたが、臨床麻酔と ICU に携わる事ができ、とても貴重な体験が

できました。医療について学ぶ事が出来た以外にも、文化に誇りを持つ事や人との関わり方などといった、人間性についても再認識させてくれる研修でした。このプログラム委員長である長谷川徹先生、研修センター長中田昌男先生、研修委員長柏原直樹先生、角田司病院長、福永仁夫学長に感謝申し上げます。最後に、全てにおいて手配して下さった藤田喜久先生、受け入れを許可して下さった Prof.Zwissler,ICU prof.Frey,Secretary tedessky に再度心より感謝と御礼を申し上げます。

①ミュンヘン大学病院玄関前



②ICU のドクター達と(毎日全員で朝ご飯です。水は再利用のガラス瓶です。さすがエコの国)



③麻酔科レジデントと

